LingvoオクトＭ＋

2025年2月10日

（月曜日）

イーグレ姫路セミナーＣ

２月例会

〇詩

〇川柳

〇エッセイ・小説

Vol.２７

傘風子図

Ｖｏｌ．２７
２月１０日（月）イーグレ姫路
セミナーＣ
読書会講師：千田草介
「ダライ・ラマ6世の恋愛詩」
次回３月１０日（月曜日）
会場：姫路アイメッセ予定
読書会：講師未定

LingvoオクトM＋の
参加は自由です。斬新な作品を募集します。

世話人高谷和幸
〒676-0815　高砂市阿弥陀1ー１１－２４
e-mail takatani_kk@yahoo.co.jp

近頃になって現代美術家の大野浩志さんの「在り方・現れ方」に再び関心が向いています。あるものとあらわれるものとは何だったのか。そのことについて深掘りしてみたいと思いながら今まで無為に過ごしています。3月の講師を募集中。

ピーク・エンドの法則

モス堀渕敬子

昨年11月、夫と私は、大阪箕面・池田と兵庫宝塚を2泊3日で訪れた。夫は1985年、東京大学に留学したが、その前に大阪外国語大学(現　大阪大学外国語学部)で半年間日本語の研修を受けるために箕面のMさん宅にホームステイした。

その方達は、私達の結婚披露宴にも来てくださったし、赤穂にも1度来てくださったことがあった。そして、夫が久しぶりにMご夫妻に会いたいと言ったのが発端だった。偶然宝塚でも同じ頃夫が所属している合気道道場のイベントがあることがわかり、箕面市の隣の池田市に私の実家のお墓があるので、お墓参りもすることにした。

Mご夫妻とお昼を「三田屋」というステーキハウスで食べることにし、彼らが箕面萱野駅に車で迎えに来ることになった。「駅に着いたら連絡して」と言われたので連絡したのだが、反対側の出口に行ってしまったようだったので、急いで別の出口から出た。そして「改札の西側」と言われたので西側をしばらく歩いて階段を降り道路を見たが、目的の青い車は見えない。そうすると電話がなって「ごめんなさい。東側だった。」と言うので、また改札に戻って東側を歩いて階段やらエレベーターがあってどう降りたらいいか(そこは建物で言えば2階だった。)わからなかったが、何とか車を見つけてそれに乗ることができた。私は焦りながらも歩くだけだったが、夫は2泊3日のスーツケースをガラガラと引く羽目になって疲れたかもしれない。そして「少し遅れます。」という連絡を車からレストランにして、やっと三田屋に着いた。

三田屋に行くのは初めてだったが、私が大学卒業後、三田屋が大学に学生食堂として入ったときいて、名前だけは知っていた。

受付で、とてもきれいな女性が出迎えてくれて驚いたが、席に案内され、注文を取りに来た女性がこれまた美人だった。このお店には何か基準があるのだろうか。ピアノの生演奏もあって、もう高級レストランだ。

食事もとてもおいしかった。メインのお肉はもちろん、副菜もスモークサーモンや黒豆などバラエティに富んでいた。お肉は焼き加減よりも量が重視されていて、選ぶことができるのは都合がよかった。

Mさんご夫妻は、ご主人が90歳、奥様が82歳でかなりご高齢で、90歳のお祝いもかねて支払いは夫がすませた。すると奥様が帰りがけに、お店でお土産を買って持たせてくれた。そして、このあとうちに来ないかと誘ってくれたので久々に行くことにした。家に着いてから、駅でのゴタゴタを改めて謝罪されたのだけど、私はそのことはすっかり忘れていた。レストランでの食事がとてもおいしかったからだ。

その後、阪急箕面駅まで送ってもらって、そこから電車で宝塚のホテルに到着した。

赤穂に戻って数日後、関西テレビの朝の情報番組「よーいドン！」の「となりの人間国宝さん」というコーナーを観ていたのだが、その中である経営者の男性が、「ピーク・エンドの法則」について話していた。それは例えば、ジェットコースターに乗るのに2・3時間待たされたとしても、ジェットコースターに乗って楽しい時間をすごし、最後にお土産でも買って幸せな気分になれば、長時間待たされてしんどい思いをしたのも忘れてしまう、というのを、彼は経営学を学んでいて知ったそうだ。これを観て、私が箕面で経験したことは正に「ピーク・エンドの法則」だったんだと実感した。それと同時に、日常のよくありそうな出来事にも、こんな分析や名前があるのだと初めて知った。なお、この法則は恋愛にも当てはまるそうだ。

投壜通信　十二　黄泉比良坂（よもつひらざか）＊

海埜今日子

黄いろい泉、比べたら、良い、さかしまです。たとえば十二時。喉に、思い出せない、においがあった。想像と実在、なのだろうか。あいだを、光のひらり、際をぬって、花びらのよう、うごめくものへ、でも、いつも、ほどける、から、まって。いない声の、いざ、波うつよ。きれつ、ながれでるのも、しじまでした。ああ、だから、きらり、明るいのか。千引きの岩、思いがけず、ちいさくって、やっぱり、ちがうね。いしぶみとして、影をそそぎ、また、ふるえるから、波紋なのかもしれない。いえ、死者たちに、たむける場所なので、もっと暗いのかと。物語と現実、なのだろうか。手紙として、投げいれることが、この世なんです。ぞっとするほど、うけいれたい、あの世のほうへ、むせる、いかないで。またたきするのが、つなぎ目だと、口がほどけ、耳がうたった。

からっぽ、あふれ、思い出すよ、ここはどこの、さかしまですか。ちがうねえ、よみふけって、まちわび、いざ、凪ぐよ、ふりそそげ。黄いろい泉、比べたら、きっと、良い境目です。現実に、だったのか。ここは、やわらかで、おおむねの無言で。想像へ、あちらより、ちらり、あとをたたない、〇時なんです。花たち、ふって、物語の声、さいては、つむぐ。こんなふうに、わたれば、よかったのか。耳が空をさしている。手紙だったか、声だったか。喉のほとけを、またぐよう、ちがうのかな。かおり、よみながら、まつよ、なげて、いざ、波へ。

＊島根県松江市にある、イザナギ・イザナミ伝説にちなんだ、あの世とこの世の境界。亡き人に宛てた手紙が投函できるポストも設置されている。

花梨と郵便受け

吉田ふみゑ

寒風吹く庭
施肥と消毒をしながら
大青さんが呼んでいる
カリンの木が弱っているよ
枯れるの
まだわからないけど
暑い夏のせいかな

庭に出てカリンの木をよくよく見た
確かに葉っぱが枯れている
この数年濃いピンクの花の数がめっきり減った
付いた実も青いまま落ちる

酷暑のせいだけじゃない
枝に郵便受けをぶら下げているせいだ

いつからかカリンの木に郵便受けをぶら下げている
三十年はなるだろう
郵便受けを吊すのをやめよう

さて、郵便受けをどこに持っていこうか
思案するだけで決まらない
郵便を受けるのに
うってつけの場所に立っているカリンの木

始まり

浜田多代子

遠くで何かが聞こえる
静かに
何かが生まれる音がする
幸せの生まれる音がする
何かが弾む音がする

山の頂上から
歌うように
ソソラ　ソソロ
チチラ　チチロ
希望の声がする

聞こえるか
確かな声が

ソソラ　ソソロ
チチラ　チチロ
待ち望んだこの瞬間

仲間たちの鼓動が
静寂の中から
浄化する空気の中から
すべての心の声が集まってくる
新しい始まりの瞬間

ご来光が顔を出して
あたりが黄金色に輝くとき
すべての人たちは頭をたれ祈る
二千二十五年の始まり

◆shell（ことに）なるだろう

―つきはよりそいながらも共存はしない…

高谷和幸

凍った雲がくだけて「ありのままを忘れる」気温が開花のしるべ（準空間的）となるだろう。その「卯月に未来の他者をつつむ嘘」に溶けた魚や時計が、この明石の池にshellのふたつのからに覆われた（なんでもきいてもかまわない）を置いて去った。かたちは作られ、海のさかいめに時間がそのかたちの破壊性を検査している？（わかりませんかその「ささやかな地異」を）姉（sifter）の残す「かたみ」のあかしえぬものの総称を準空間の「それ」と言っても良いだろうか？。（がいとうすることばがみあたりませんか？）わたしはひとと、地に座り、見上げる「ろ」の窓が「つき」とわたしたちを視野に納めていると思われるのは「それ」がかくれた「それ」のshellとしてまだ

わたしと「ひとの島を産む」かも知れないあわい夢を残しているのだろうか？長い間（そのあいだもわたしはほろびました）。かたちを得て、震える時間がその破壊性をあらわにするのはひととわたしたちのもとにあるもの「それ」。「人の心を知るとは…。人の心とは」（プログラムがブラス化しているのでは？）記憶「その夜識ったエリーザベトの物語りを習った」を散らばってしまった言葉のなごりとして。わたしらは「忘れる」であろう。ひとりを待つことをなぜ覚えたかも、置き去りにした公園で。

連続と離散の間で

しろやあきのり

周りのものを切り刻むだけ切り刻んだ
ぽつぽつぽつぽつ
断片が落ちてくるよ
木が木で無くなり
花も花で無くなる
豊潤で連続的なアナログの世界は
その切り刻みに悲鳴を上げるよ

さて
産声というものは
二度上げるのではなかろうか
一度目は産まれた時に泣きながら
二度目は言葉を覚えて苦しんだあと

叫びのような
声にならない声が
出る時の産声が二回目

デジタルさんよ
これ以上離散させないでおくれ

悲鳴
詩
仏教

僕はもう
アナログの世界に帰ってしまいたい
土みたいに

ダライ・ラマ６世詩集から短い紹介と詩3篇

千田草介

彼は、チベット仏教界最高権威の化身、
ダライ・ラマとして養育されながら、
成人するや、僧侶としての道を歩まず還俗し、
ラサの街に浮き名を流し、廃位され、
二十年あまりの短い生涯を終えた。
その特異な生き方にも拘らず、
あるいはそれ故に、彼が残した恋愛詩は、
現在に至るまでチベット人に広く愛唱されており、
彼は歴代ダライ・ラマの中で
最もチベット人に親しまれている
ダライ・ラマである
（訳者・今枝由郎氏の解説より）

心にかなえる娘子（むすめこし）を
我が伴侶（みちづれ）に娶らんは
海底（うみぞこ）深く一粒の

輝く真珠を得る如し

我が喇嘛(ラマ)僧の御前(おんまえ)に
教えを乞いに進みしも
深き御法(みのり)にあらずして
娘を想う心のみ

我が御教えの喇嘛僧は
想いだにすれ現われず
かの清楚なる娘子は
想わざれども心離れず

螺旋階段

内田　正美

闇の空でいかずちの音がする
遠く近く大きな龍が怒っている

　男が螺旋の階段を上っている
　いや、下りているのかもしれない
　稲妻の一瞬の明るさにわたしに似た男の後ろ姿を見た

わたしたちの姿は螺旋の配列を引き継ぐことから始まった
古い記憶をいまはわたしのモノとして
わたしを始めた
古い記憶はいつ雲のなかへ隠れたか、スガタはみえない
モノであるわたしにもこころが宿り
楽しくもあり、悲しくもあり、ふわふわしている
どこまでも続く螺旋の階段がある
わたしは

同じような風景を毎日眺め
同じではない階段を踏みしめて
わたしは記憶を増やしていく
わたしのからだも変わっていく

龍はスガタを変えたウェーブであり
どこまでも続く螺旋の階段でもある
空の奥深くに埋葬されたむすうの魂のありかへ
波は寄せている

小説・狸島ブリーフ（２　）

アイン・レーラー

「協力隊での三年半、楽しかったことはひとつもありません。それでも自分にとって代えがたい貴重な経験となりました」
いつも温和な平和さんの眼が鋭くなった。明佳里さんは、先輩の意外な言葉に一瞬たじろいだ。それまで青年海外協力隊に行った人からは、「とっても楽しいですよ」という話ばかり聞いていたから。
〈真逆のことをいう人だわ〉
平和さんは、協力隊の活動を終え帰国。JICA(独立行政法人国際協力機関)で働いていた。つい去年、県の農業改良普及所に採用されたばかり。歳は三つ上らしい。研修先で、
「わたしも協力隊に行きたいんです。いろいろお話を聞かせてください」思い切って声をかけた。
そしてインドやネパールを旅してきたこと、高校時代から協力隊に参加したくて、この農業改良普及員の仕事につき、「現職参加制度」に挑戦したいことなどを熱を込めて話す。平和さんは終始無言で、明佳里さんの心の内を確かめるように聞き入っていた。やがて今度は自分の番だといわんばかりに、協力隊での生活や活動を語り始める。
一回では尽きず、その後何回も協力隊の話で盛り上がる。あるとき、
「ボクは、自分のやりたいことには忠実です」ポツリという。
その短い言葉に信念を感じ、両手を膝に置いてまっすぐ見つめた。
「ボクは、熱帯の農業に貢献する人になりたいと思っています。今は地元に役立ちたいと活動していますが。このままでは、自分の描く夢の芽は出ないことに気づきました」

一息おいて、
「実は、今年、政府の採用試験を受け直したんです。受かれば退職します。もしかなえば、海外の農業支援プロジェクトに関わりたいのです」
平和さんの壮大で着実な夢にガツンと叩かれたよう……。羨ましい、悔しい、そして別れがくるかと思うと、たまらなく寂しい。
やがて、彼は採用試験に合格し、県職員を離れることにーー。
〈最後の、デートかな〉惜別の念にかられていると、さらにまた衝撃的な言葉が発せられた。
「結婚してほしいんです」
明佳里さんは、凍り付いたまま、空白の状態。しばらくして、ハッと我にかえる。
〈この人と結婚するということは、退職するということ〉
「いや、それは無理です」
「そうですか。でも、しばらく考えてみてください」真剣な表情をくずさず去っていく。
それから明佳里さんは、迷い続ける。
「青年海外協力隊に行きたい」「平和さんと結婚したい」「農業改良普及員を続けたい」……。
この三つが頭をぐるぐる廻る。すべてを適えることは不可能。協力隊と普及員の両立は出来るかもしれないが、いつになるか分からない。平和さんが政府の部署に転職しなければ、結婚したいとは思っていた。農業改良普及員の仕事は大好きだったので辞めたくない。悶々と考えて、悩んで悩んで底に着いたとき、ある言葉が降ってきた。
「人間、二つ良いことはありません」
母校の大学で教えておられた、伝説の哲学者の言葉。入学する三十年以上前に退官されていたが、いまだ学生の間でも、うわさになっていた。すがりつくように、その言葉を噛み締めてみる。人間

は二つも三つも良いことを得ようと懸命に努力するが、人生の岐路には何かを捨てなくてはならないときが必ず来る。自分は今、その時期なのだ。哲学者の教えは「両立は出来ない」。まして自分は鼎立しようとしている。何かを捨てなければ、進めない。

「退職して結婚を取ろう」予想外の選択。男のロマンに賭けたーー。

決めたとたんスッーと、気が軽くなり、新しい未来が開けた。

職場の上司に報告する。

「それは、おめでとう」顔をほころばせながらも、

「あんたをここまで育てるために、どれほどみんな苦労したか」

親切だった農家の人たちの顔が浮かぶ。この言葉は、ずしりとのしかかる。

すぐに退職、結婚。翌年、青年海外協力隊に応募する。

ミクロネシア連邦の農業支援を漠然と考えていた。

〈ミクロネシア連邦って、どこにあるのかしら?〉朧げながらしか分からない。

〈この際、しっかりしなくちゃ〉地図を広げて、調べ始める。

フィリピンの遥か東に点々と存在する諸島。ヤップ州、チューク州、ポンペイ州、コスラエ州の四州からなる。

〈だから、国旗に四つの星があるんだわ〉

そのまま進めば、マーシャルそしてハワイへと続く。南は赤道を越えパプアニューギニア、ソロモン諸島をへてオーストラリア大陸に至る。

もともとは、ドイツ領だったが、第一次世界大戦時、日本軍が占領し、そのまま国際連盟から委任統治することが認められる。サイパン、グアム、パラオなどの島とともに、インフラ整備、産業振興、住民の教育をおこなう。南方の資源確保をもくろんでいた日本軍は、いざ戦争になった場合を

想定して、要塞や軍需施設を築くようになる。
〈へえー、おもしろい歴史があったんだわ〉
広い太平洋の島々で、激しい戦争があったことは、日本史で習ったかな。
――九官鳥先生の授業を思い起こす。
「太平洋戦争は、ハワイ真珠湾攻撃で始まったと思っているやろ？」太平洋の地図を背に先生は意味ありげな表情で、見回す。
「ちゃうんやで、ここも、ここも」南方のマレー半島、スマトラ島のパレンバンを指す。
「なんで、ここを攻めたのかな」みんなの顔を見回しながら微笑む。
〈難しい質問だわ〉明佳里さんは、当てられないように視線をはずす。手を挙げない子は当てないと分かっているのだが、習性のようなものが残っている。静寂が教室を包む。
「じゃあ、ヒントを出そう。日本はなにがなかったのかな」
「せきゆ？」どこからともなく呟く声。
〈猫君だわ、こんなときの頼みの綱は……〉
躊躇いながら手を挙げかけた子に「鷺君」と指名。〈やっぱり〉
「日本は石油がないので……？」〈さすがの鷺君も自信がないのか〉
「そう、石油だよ」先生はうなずく。
緊迫した日本の情勢がみんなに伝わる――パレンバンに落下傘部隊が降下。
さらに先生は、ミッドウェーの敗北、ガダルカナルの激戦について授業を進める。
――ここまで思い起こした明佳里さんは、
〈アメリカは物量や情報、兵力に勝っていたと思っていたけど、食料や医療も違っていたんだ〉改めて認識する。

〈たくさんの人が亡くなったんだわ。それもわたしと同じ若い人〉
〈兵隊さんだけでなく、現地の人も被害を受けたに違いない〉
明佳里さんは、自分の使命のようなものを感じた。
〈青年海外協力隊についても知っておかなくちゃ……〉
青年海外協力隊は、日本政府が行う政府開発援助(ODA)の一環の事業で、国からの支援を受けている。援助の相手国は開発途上国と呼ばれる国々。この事業は、JICAが実施する。援助相手国からの要請を受け、それに見合った技術や知識、経験をもつ青年を募集する。そして、選考に選ばれた人を訓練し派遣する。
〈なぜ国は、個人が途上国で活動するボランティア事業を始めたのだろう?〉
時代背景まで追究する。ここまで調べると
〈一番初めは、どんなんだったのだろう?〉という疑問が湧く。
発足当初の隊員は五名、派遣先はラオス。隣国は北ベトナムで、ベトナム戦争中、緊張感を伴った出発だった。女性二名は、首都ビエンチャンで日本語や生け花を教えることが任務。男性三名は農業試験場で、野菜の栽培や稲作の指導にあたる。十数倍の競争率から選ばれた。〈すごい競争率。一九六四年には、東京オリンピックがあったし、外国への関心が高まっていたんだわ〉
青年海外協力隊の歴史を知るに至って、押さえがたい衝動に駆られた。
明佳里さんの派遣先は、大洋州のミクロネシア連邦に決まる。そして、有名なナン・マドール遺跡があるポンペイ島で農業高校の教師をする。
二年の任務を終え、再び夫とともに生活を営む。
今度は、女性として生きようと、子どもを出産、育児に専念する。夫は狸島(たぬきじま)にある研究センターに勤務するようになり、家族で移り住む。

アフリカのマンディンガ共和国へ、夫の派遣が決まる。明佳里さんは、子どもを連れて一家で移住することを決意する。
三年間のアフリカ生活を終えて、元の狸島へ帰国。
「あれ？」
明佳里さんは、驚きを隠せなかった。六年生になって初めての授業。
新しい先生は、まるで九官鳥のように自由自在、跳び跳ねるように進めていく。教科書は、ほとんど見ずに説明することばの分かりやすさ、滑らかさ。ともすれば遅れがちになる子どももうなずく。かと思えば、すごく良くできる子が首を傾げるような質問を投げかけ、ニコリとする。
「この先生、授業を楽しんでいるわ」
目からウロコ。一言も聞き漏らさないように聞く。先生は、今までやったこともない学習を次々と提示する。社会科ではグループで調べ、研究発表をする。そして体育では、「マット運動の連続技」。運動が苦手な明佳里さんも身体表現の喜びを感じる。
　また同和学習で、十時間ぐらいかけて一つの教材を追求する。差別が起こる原因の追究と湧きあがる感情が捉えて離さない。
〈そういえば、先生はいつも朝礼台に立っていたわ〉
運動会の開会式や閉会式を思い描く。はなやかな入場行進。千五百人もの全校生の整列。先生の号令一下、ラジオ体操が始まる。厳粛な式の中心に先生がいたーー。体育の先生とばかり思っていた。けれど、こうやって担任となり学級で目にする先生は全然違う。生き生きと授業を進め、わたしたちに考えさせる。一つひとつの発表に丁寧に応える。ときどきユーモアを交えるのが、たまらなく面白い。
先生は学校全体の体育担当をしているのだろう。授業を終えると、そそくさと出てしまう。いろん

な調整に追われているのでは……。
〈大きい学校やから、大変やな〉
チャイムが鳴ると慌ただしく現れる。何事もなかったように。
〈よかった〉
充実した六年生。でも、楽しく夢中な時間はすぐ過ぎ去る。卒業までいい出せずに終わってしまった。

三十八年たった今も……。
なんとか気持ちを伝えたい。
あのとき、テレビドラマをみなかった悔やみ。大事な宿題を取りこぼしてしまった気分が、まるで喉の奥に刺さった小骨のようにある。
〈なんとしても、『ルーツ』を読まなくっちゃ〉
帰国して一息つくと、フツフツと沸き上がってきた。図書館へ行って探す。夢中で読み耽る。
あらためて原作を読んで、心臓を鷲掴みにされた。
「クンタ・キンテの世界」が、アフリカでの自分自身の暮しとともに思い切り拡がる。同時に六年七組の雰囲気が蘇る。その学級で隣の席だった不如帰君に、
「あのドラマみた？」聞かずにはおれない。
「奴隷制度の不条理さと、自国の恥ずべき歴史を、ああいうドラマにするアメリカってすごいな……」
〈えー、九官鳥先生が伝えたかったことが、ちゃんと伝わっている〉
遅ればせながら、仲間入りした気分になって、ちょっとホッとする。　もう、この機会を逃しては

二度とない。先生も歳をとられているに違いない。積年の想いに、矢も盾もたまらず手紙（ブリーフ）を書く。何枚にもなった。
〈あっ！　先生の住所は？　ドジなわたし……〉
教員をしている大学の同期生に電話をして調べてもらう。退職者名簿から見つけてくれた。
ついに投函――。

三十八年をへて星からきた明佳里さん！
今日は。ずいぶーん、お久しぶりですね。
あなたの心のこもったお手紙、何度も何度も読ませてもらいました。そして、調べました。マンディンガ共和国なんて、どこにあるかも知りませんでした。へぇー、アフリカのサハラ砂漠のど真ん中にあるんですね。日本でノウノウと過ごしているわたしなどには、とても分からない厳しい気候、風土なのでしょう。そこに三年間もおられた……。
でも、あなたには耐えられる、それまでの学びと経験が出来上がっています。「家族の強靭な絆が我が家の財産となりました」とお手紙に書いておられるように確かに宝を得ましたね。
あなたの半生、すばらしいですよ。地球的な規模での活躍ができるように、一歩一歩積み上げていることがよく分かります。教室で、キラキラした瞳で黙って話を聞いておられた姿を思い出しました。
わたしの拙い教育実践の中から、ひとつの星を紡ぎ出していただいたこと、感謝です。それは、教材が良かったからでしょう。そして、何よりも、「それをみることができなかったということ」が動機になっていると思います。
ずーとあなたの心の隅で燃え続けていたのです。

この度、長い年月をへて「ルーツ」の原作を読まれるという行動を起こし、そのときの担任であったわたしに手紙を書くということに繋がったと考えます。
本当に、教育とは不思議なものですね。学校の教科書ではなくてテレビドラマ、みていなかったこと、五十歳近くなってから……教育が目覚めるということが現実に起こるんですね。
実は、わたしは、そういう力が教育にはあると信じて、教師という道に入りました。今日は、その証(あかし)を一つ見せていただき、大変嬉しいです。ありがとうございました。
明佳里さん、これからもお元気で、毎日の仕事や生活を楽しみながら、お過ごしください。
愚禿九官鳥
平和明佳里さま

―完―

付記・『ルーツ』のあらすじ

血湧き肉踊るような未知の世界。主人公は、著者の、七代前のクンタ・キンテ、一七五〇年、西アフリカ、ガンビアのジョフレ村マンディンガ部族に生まれる。アフリカのジャンルやサバンナの地形、気候、動物、植物などが事細かに描かれている。そして部族の信仰(アラーの神)・生活・習俗・儀式などをとおして、生きていく術と誇りを、身につけていく。瞬時にして敵か味方か嗅ぎ分ける感覚を磨く。部族ごとに言語が違い、文字をもたない。すべて口伝なのである。アフリカには何万という部族がいるだろう。従って、アメリカに奴隷として売られた子孫が、自分のルーツを特定することは不可能に近い。
十七雨(歳)のとき、トゥボウ(白人)と黒人の奴隷商人に捕まる。奴隷船で三ヵ月かかって、アメリ

カのヴァージニアに連れて来られる。驚いたのとに著者ヘイリーは、このときの船がロード・リゴニアー号であり、一七六七年九月二十九日に、ガンビア川を出帆したことを突き止めている。乗せられた奴隷は、百四十人そのうち四十二人は息絶えて海に遺棄された。三分の一の死者というのは、平均的なものであったらしい。残酷極まる話である。そしてクンタは、競売にかけられ８５０ドル（1ドル＝３６０円として約31万円）で売られる。

部族の誇り高い血筋を受け継ぐクンタにとって、奴隷の立場はとうてい受け入れられるものでなかった。彼は、四度の脱走を試みるが、いずれもずる賢い捕縛者と鋭い嗅覚の猟犬によって失敗に終わる。そして片方の足先を切断される。

しかし、彼は肉体は売られても、魂までは売り渡さなかった。娘に部族語でアフリカのことを語り聞かせた。それは、代々続いていく。これが、著者ヘイリーが部族の源を突き止める決め手となった。クンタ→キッジー→ジョージ→トム→シンシア→バーサー→アレックス、七代（百七十一年）にわたる。アレックス（一九二一～九二年）は、十二年にわたって調査し、この壮大な物語を書き切った。彼は末尾で述べる。

「いままでの歴史が圧倒的に勝者によって書かれてきたという現実の遺産の誤りを、この私たちの民族の物語が幾分でも是正することができるようにと」（下巻　三九八頁）

ちょっとだけ知ってるフ・ジ・テ・レ・ビ

情野千里

フジテレビから電話がかかって来たのは、２００８年８月１３日の午後だった。それはギリシャ滞在中の私に、夫・克夫の急死を知らせる電話が入ってから、１９日目の出来事で、妻から未亡人へと呼び名が変わって間もない私に突然舞い込んだ出演依頼だった。『東京マスメディア会議?』は各種雑誌（オタク系が多い）の〝鉄板記事〟をネタにトークを繰り広げる番組らしかった。『川柳マガジン』に「川柳パフォーマンス占い」を掲載中だった私は、古代文字の大垂れ幕の下、押しかけ助手・田村さえが朗々と川柳を吟ずるなか、白塗り、白縮緬の振袖で前転、側転の大暴れ……。いささか暴れすぎたかもしれない。収録した川柳パフォーマンス占いの部分はカットされ放映にはいたらなかった。思うに、主任ディレクターと私たちを推してくれた担当ディレクターとのパワーゲームのスィッチがどこかで入って仕舞ったとか？　中居クンの件は知らんけど、私の場合はきっと、そうだ。

菜っ葉喰い人種ではあるが人も喰う

ジャズ・バーにまわる貰いの少ない猫

眉の薄いおとこに貰う惚れ薬

ホットシャワーの下で泣くのは恋乞食

老いた金魚の新春（はる）の港の初泳ぎ

きれいなおとこ八百人の阿保踊り

魔法使いに貰った食べられないお餅

これもんとそれもんの間の冬の大三角

２０２５年２月１０日（月）Lingvoオクト M＋
イーグレひめじ４階セミナーC

上記のQR コードでメールアドレスをダウンロードして電子版を送れと明記の上通信ください。PDFをお送りします。